

本書を下記の人々に捧げる

どんな人でも神聖な目的をもって生きていることを教えてくれた、父方の祖母リディア・ポーエル・コーテン。

天命にしたがうことを可能にしてくれた両親テッド・コーテンとマーガレット・コーテン。

私が放棄した家庭の責任を背負ってくれた弟ロバート・コーテン。

人類が現在迫られている選択を明確化するに当たって、自由にインスピレーション、分析、表現を借用させてくれたトーマス・ベリー、リーアン・アイスラー、ジョアンナ・メイシー。

六五歳を迎えた時に老齢期への手引きをしてくれ、老齢期の生き方がはっきりと見えるよう助けてくれたティモシー・イイストワノホパタアキイワ。

そしてジョージ・W・ブッシュ大統領。同政権はアメリカ民主主義の帝国主義的な側面を白日の下にさらし、私が子供の頃無知に基づいて抱いていた幻想の化けの皮をはがし、本書の執筆を余儀なくしてくれた。

謝辞

本書『大転換』は、四六年前、大学四年生の時に始まった私の思索の旅から生まれてきたものである。それ以降、袖が触れ合ったほとんどの人々が、本書のなかで述べてある省察に何らかの形で貢献してくれた。以下では、本書の執筆に専念してきた三年間に、知り合って、個人的にお付き合いさせていただいて、私の考えに特に貢献してくれた方々のお名前をあげさせていたいただきたい。

妻のフラン・コーテンは、私の思索の旅にずっと付き合ってくれ、概念の明確化と本書の執筆を側面支援してくれた。各章について編集上の詳細な助言さえももらった。重要な概念の定義に関しては、以下の方々に助けていただいた。ジャン・ベニユス、トーマス・ベリー、マーカス・ボーグ、リーアン・アイスラー、マシュー・フォックス、マエロワン・ホー、マージョリー・ケリー、フランシス・ムーア・ラッペ、ジョアンナ・メイシー、ニッキー・ペルラス、ポール・レイ、エリザベット・サトウリス、バンダナ・シバ、メグ・ホイートリー、ウォルター・ウイנק。サラ・バン・ゲルダールは概念と概要の当初案について共同作業をしてくれた。

ベレット・ケーラー出版社の創業者兼社長であるステイブ・ピエルサンティには、特に感謝し

たい。本書の企画から最後の制作に至るまであらゆる側面で、惜しめないサポートを提供していただき、いつでも相談に応じてくれた。同出版社のスタッフ全員に謝意を表したい。彼らの情熱と支援がなければ本書は完成しなかったであろう。また、一九八三年以来、私の著作を出版してくれているクマリアン出版社のクリシユナ・ソンデイやそのスタッフとの継続的な友好関係もうれしかぎりである。

ダニー・グローバー、ロバート・ジェフリーズ、ベルビー・ルークスは、アメリカ史の形成には人種が重要な意味をもっていることに関して注意を喚起してくれた。ラファイ・カポーキアンは保守派と自由派という一見では宥和不可能な政治的分断に関して、子供が橋渡し役になる可能性について幅広い懸念があることを指摘してくれた。ラリー・ダロス、シャロン・パークス、エリザベス・ピンシヨ、デービッド・ウォーメルドルフ、ドナ・ザジョンクはそろって、人間の意識の発達段階と、それが潜在的な性格の実現化に対してもっている一般的な示唆に関する理解を助けてくれた。

本書の執筆中、『イエス！』誌の首脳陣とスタッフは、私にとってプライベートな知的社会として機能してくれた。特記すべき貢献をしてくれた方々で、まだお名前を上げていない人々は次の通りである。ガール・アルペロピッツ、ロッド・アラカキ、デイー・アクセルロッド、ジル・バンバード、リチャード・コンリン、キム・コリガン、ターニヤ・ドーキンス、キャロル・エステス、ケビン・フォン、スーザン・グリーソン、アリサ・グラビッツ、キャロライン・マッコネル、ギフォード・ピンシヨ、マイケル・ラモス、ダン・スピナー、オードリー・ワトソン。

「地域経済活性化に向けた企業連合」(BALLE) および「グローバルイノベーション国際フォーラム」(IFG) という二つの団体の仲間も、重要な知的支援を提供してくれた。BALLEの会員で特記すべきは以下の方々である。ローリー・ハンメル、ミシエルおよびアレク・ロング、リチャード・パーレ、ドン・シエーフアー、マイケル・シューマン、ジュディ・ウィックス。IFG関係者では次の方々のお名前を上げさせていただきたい。デビー・バーカー、ジョン・カバナ、モード・バーロー、ウォールデン・ベロ、ロビン・ブロード、トニー・クラーク、エドワード・ゴールドスミス、ランドイ・ヘイズ、コリン・ハインズ、マーティン・コール、アンドルー・キンブレル、ジェリー・マンダー、ヘレナ・ノーバークⅡホッジ、サラ・ラレイン、サイモン・レタラック、マーク・リッチー、バンダナ・シバ、ビクトリア・タウリⅡコーパス、ローリー・ウォラック。

ミシエル・バークハートは執筆の初期時点で、ボランティアの研修調査員として、徹底的で疲れを知らない補佐をしてくれた。マーク・ダウイー、トム・グレコ、トッド・マンザ、ガブリエラ・メラノ、テッド・ネイス、ヒラリー・パウーズなども全員がベレットⅡケーラー出版社の編集プロセスの一環として貴重なフィードバックを提供してくれた。ダグ・ピペルは最終稿を提出する前に、完成原稿のチェックで天才的な才能を発揮してくれた。原稿整理係のカレン・セキグチは、プロの才能と協調的な仕事のやり方を兼備していたので、仕事をするのが楽しかった。

草稿段階で有益なコメントをしてくれたのは以下の方々である。ピーター・パウアー、スーザン・キヤラン、リーアン・アイスラー、ロバート・アーウィン、マシユ・フォックス、ビル・カウス、

エリック・クーナ、ドン・マッケンジー、スー・マゲレガー、ビル・フィップス、マークス・レナー、エリバベット・サトウリス、ロジャー・シンプソン、メリッサ・スチュアート、ラマ・ツモ。次の人々もアイデアやインスピレーションを得るのに寄与してくれた。メデア・ベンジャミン、デービッド・コブ、ジョン・コブ・ジュニア、ケビン・ダナハー、ハンズ・ピーター・デュエール、トム・ハートマン、ボブ・ハセガワ、ジム・ハイタワー、ジョージア・ケリー、ダル・ラマグナ、アータ・ロディック、ジュリエット・シヨール、トム・スレッシャー、リンダ・ウルフ。

キャロリン・ノースはホイッドビー研究所主催という形で招待ベースのセミナーをアレンジしてくれた。ここでは草稿に対して、次の方々から有益なコメントを頂戴した。スカイ・バーン、エレン・キャミン、ダグ・カーマイケル、エリザベス・デービス、ハリム・ダンスキー、カート・ホルティン、ステファニー・ライアン、マリリン・ソンダース、ボブ・スティルガー。討論のリーダー役はシャロン・パークス、筆記役はラリー・ダロスであった。

インスピレーションは友人や同僚からも得ることができた。特に有益な意見交換ができたのは、「ポジティブな未来ネットワーク」が進歩的リーダーのために開催した一連の「可能性の現状」という研修会だ。関係者を以下に列挙しておきたい。シャリフ・アブドラ、レベッカ・アダムソン、ブラハム・アハマデイ、ネイン・アレハンドレス、ネギン・アルマツシ、カール・アンソニー、ケニー・アウスベル、レイチエル・バグビー、ジョン・ベック、ジュリエット・ベック、エジエット・ベトルー、グレース・ボッグズ、イエレナ・ボックサー、チャック・コリンズ、スーザン・デービ

ス、ジョン・ド・グラーフ、ドゥルル・デリンジャー、ブライアン・ダードウスキー、イボンヌ・
デイオン・バッファロー、シンディ・ドミンゴ、ロニー・ダガー、メル・ダンカン、シェリ・ダン・
ペリー、マーク・ドーキン、マライカ・エドワーズ、ジム・エンブリー、クリス・ギャラハー、ブー
クダ・ガイザー、トム・ゴールドトウース、シヨーン・ゴンサルベス、サリー・グッドウイン、エ
レーヌ・グロス、ハーマン・ギール、ハン・シヤン、ローズマリー・ハーディング、ピンセント・
ハーディング、デブラ・ハリー、ポール・ホーケン、プラミラ・ジャヤパル、ドン・ヘイゼン、フラ
ンシスコ・ヘルナンデス、フランシコ・ヘレラ、キャッシー・ホフマン、メルビン・フーバー、エ
リソン・ホーン、トーマス・ハリリー、テイモシー・イイストワノホバタアキイワ、バーレーン・
ジョーンズ、ドン・ケグリ、ピーター・ケント、デニス・クチニヒ、ウォーレス・ライアン・クロ
イワ、メイズ・ルイ、キャロリン・ルーケンスマイヤー、マーク・ルイックス、メラニー・マッキノ
ン、ジェフ・ミルチエン、ジョン・モホーク、ビル・モイヤー、チャリー・マーフィー、エリッ
ク・ネルソン、ニック・ページ、スーザン・パートナウ、ニコール・ピアソン、ニック・ペニマン、
ケリー・クワーク、ジャマル・ラーマン、ポール・レイ、ジョー・ライリー、アニタ・リオス、ミシ
エル・ロビンズ、オーシヤン・ロビンズ、ジャン・ロバーツ、ビッキー・ロビン、シボン・ロビンソ
ング、ジョナサン・ロウ、ペギー・サイカ、オサゲフォ・ウール・セコウ、プリシラ・セツティ、
ロン・シエール、ニーナ・シモンズ、アリス・スレイター、マーク・ソマー、リンダ・スタウト、ダ
ン・スウイニー、クレイトン・トーマス・ミュラー、バーバラ・バロコア、ロベルト・バルガス、

ジョン・ボーン、サラ・ウィリアムズ、レイ・ウィリアムズ、アカヤ・ウィンウッド、メリッサ・ヤング。

本書は「民衆中心の発展フォーラム」(PCDFフォーラム)のプロジェクトとして、研究・執筆された。このフォーラムは市民の自発的な活動を通じて、正義にかなった、包容的で、持続可能な社会を創造することに専心している組織や活動家の非公式な連合体である。まったくのボランティア組織で無給である。私は本書の執筆に関していかなる筋からも個人的な報酬はまったく受けていない。また、本書の販売にかかわる印税はPCDFフォーラムに寄付されて、その活動継続を支援するために使われることになっている。本書で表明した意見は筆者個人のものであり、上述した方々、PCDFフォーラム、あるいは筆者が関係しているその他のいかなる組織のものでもない。本書の上梓を助けてくれた多数の友人や仲間の全員に深謝するとともに、うっかりお名前の言及を失念した方々にはお詫びを申し上げておきたい。

デービット・C・コーテン

www.davidkortten.org

www.greatturning.org

www.developmentforum.net

われわれは、人類の未来を選択しなければならない、という地球の歴史のなかできわめて重要な時期にきている。世界は一層相互依存度を強めしかも、脆弱になっていくので、未来は大きな危険と約束の両方を秘めている。前進するためには、われわれの文化や生活様式には幅広い多様性があるといえ、共通の運命を背負った人類という一つの家族であり、一つの地球共同体であるということを認識しなければならない。われわれは自然に対する尊敬、普遍的な人権、経済的な正義、平和の文化に基づき、持続可能なグローバル社会の実現に向けて、一致協力しなければならぬ。そのためには、地球上の人類であるわれわれは、人間相互に、より偉大な生物コミュニティに、そして将来世代に対するわれわれの責任を宣言することが至上命題である。

地球憲章（二〇〇〇年）

大転換

将来の世代は、彼らが生きていられる世界が残っているとすればの話ではあるが、現在われわれが実行している生命維持が可能な社会への画期的な移行を振り返ることになるだろう。そして、それを大転換の時期と呼ぶことになるかもしれない¹⁾。

— ジョアンナ・メーシー —

われわれの子供たちや、またその子供たちは、われわれの時代を一体どういう名前前で呼ぶのだろうか？ 怒りと挫折を感じながら、むだな消費が波状的な環境システム崩壊の加速化につながり、地球上の残存資源をめぐる競争が激化し、人口が激減し、生き延びている人々も冷酷な領主が支配する領土に分断されて交戦状態にあった、と「大崩壊」の時代のことを語っているのだろうか？

それとも、自分たちの祖先は危機を好機に転換して、人類のより高次な可能性を会得し、お互い

に、また生きている地球と創造的なパートナーシップを形成して生活することを学び、人類の可能性という新時代を生み出した、と「大転換」という高貴な時代のことを楽しそうに祝福しながら振り返っているのだろうか？

以下は本書『大転換―帝国から地球共同体へ』の前提である。われわれ人類は取消不可能な選択を迫られているという決定的な瞬間に立ち会っている。われわれの集団的な対応が、人類が生存しているかぎり、われわれの時代がどういう形で記憶されるかを決定することになるだろう。残された時間のなかで、われわれは個人および集団として行う選択が、現在生きているわれわれが後に続く世代に贈る未来への投票になるということを一人一人が認識しておかなければならない。大転換は予言ではない。それは一つの可能性だ。

日本語版への序文

私が本書（原著）の原稿を書き上げたのは二〇〇五年十一月のことである。二〇〇八年十一月、日本語版用にこの原稿を書き始めたが、最近起こった二つの歴史的な大事件を受けて、今後の道が変わってきたようである。グローバルな金融システムが破綻して、経済的な荒廃が世界中に拡散している。アメリカは若くて非常に有能な、情緒的に成熟し、多文化的な有色人種のリーダーを次期大統領に選出した。この二つの大事件のおかげで、わずか三年前には閉ざされ、しかも鍵さえかかっていた扉が開くことになった。

金融システムの破綻は基本的にグローバルな自由市場資本主義が失敗したということを証明している。強欲な金融投機家に対してだけ説明責任を負うグローバルな大企業が支配する市場は社会的・環境的に失敗しただけでなく、自己の論理においても失敗したといえる。われわれは二一世紀の社会的・環境的な現実に対応する新しい制度に基づく新しい経済モデルを必要としている。

職務の分割

アメリカの新しい大統領がアフリカ系アメリカ人であるという事実は、アメリカにおける人種のスーリーを書き替えることになるという点で大きな象徴的意味をもつ。しかし、アメリカと世界にとってより重要なのは、バラク・オバマが並外れた知性だけでなく、情緒的な成熟性、若者のような活力、多文化的な世界観、切迫した社会的・環境的なニーズに取り組むというコミットメントを合わせもっていることであろう。さらに、深い変革への道に導いていくためにはボトムアップ型の草の根運動の役割が必要不可欠である、ということも彼は認識しているようだ。

現下の仕事に関しては職務の分割が必然的に必要となるだろう。オバマ大統領は次のような遺産を引き継ぐことになっている。破綻した経済、拡大する経済的絶望、破産した財政、イランとアフガニスタンにおける戦争、無能な夢想家を故意に指名したことによって弱体化した連邦官僚機構、地球温暖化、天井を打った石油、全米各地で崩壊しつつあるインフラなど。前政権が残した記念碑的な混乱を一掃することが、彼にとって必須の優先課題になるだろう。

この優先課題に取り組み際、オバマ大統領は混乱の発生にそもそも重大な責任を負っている帝国という制度のなかで仕事をせざるを得ない。できる限り有能で経験豊かな人々を政府に迎え入れようとするだろうが、それは主に現在あるがままの制度に仕えることで経験を積んだ人々になるということの意味する。このような人々は限界的な調整を施すことによってシステムの修正に努めるだろう。そ

の多くは必要な仕事ではあるが、決して十分とはいえない。

支配の構造を排除し、人間の消費を地球の生きているシステムと均衡させ、万人のニーズを満たすためには、オバマ政権内部でさえ真剣に検討されている可能性は低いもの、少なくとも話題にのぼっているであろうことをはるかに凌駕する制度的な変革が必要である。ウォール・ストリート金融機関を規制するという議論があるだろうし、軍事費を削減しようという議論が起こる可能性もあろう。しかし、そのような措置は既存システムを限界的にいじることではない。オバマの側近グループ内のだけかが以下のようなことを提案する可能性は低い。すなわち、略奪的なウォール・ストリートの金融機関は抹殺すべきである、公益に奉仕しない私益企業の免許は取り消すべきである、健康指標が経済パフォーマンスの重要な指標としてGDPに取って代わるべきである、軍備は小規模な国境警備力にまで削減すべきである。帝国から地球共同体に転換するためには、これらの措置すべてが必要となる。

転換を図るための措置について、もし議論が起こるとすれば、それは権力機構の外にある市民グループとの間で始まるだろう。普通の人々がそのような強固な制度を変えることができるという考えは、一見ナイーブだと思われるかもしれない。しかし、そう遠くない過去である君主制の末期においても、奴隷制と女性や有色人種の排除も同じくらいナイーブであった。どちらの制度についても、変革は基本的な真実を話す勇気をもった少数の人々の間の会話として始まったことを思い出そう。それが政治的な風景を一変する力強い運動を各国で、さらには世界的に引き起こすに至ったのである。包

容的で前向きなビジョンをもつバラク・フセイン・オバマという名前の黒人が世界で最も力のある大統領職に選出された時、アメリカだけでなく世界中であれほど大勢の人々が歓喜の涙を流したという事実ほど、民衆運動の力をはっきりと証明するものはない。

すべての変革は会話で始まる。ウォール・ストリートの破綻とイラクやアフガニスタンにおける算のない非通常の戦争の経験が、人類が直面する甚大な社会的・環境的なニーズに取り組むことを以前からコミットしていた有能なリーダーに大統領権限が移行することで生み出された楽観論と結びついて、ユニークで絶好のチャンスを作り出している。例えば、以下のような真に生活に奉仕する経済を作り上げることができる可能性について、グローバルな会話を始めることを想像してみようではないか。

- ① 万人に健康で威厳のある充実した人生を送る機会を提供する
- ② 人類の消費を地球の自然シスムと均衡させる
- ③ 思いやりのある強いコミュニティという関係を育む
- ④ 公平で社会的に効率的な資源の配分を支持する
- ⑤ 一人一票制の市民主権という民主主義の理想を実現する

人類共通の夢

お金ではなく、健康こそ福祉を測る真の尺度である。われわれは経済パフォーマンスをわれわれが望む尺度——健康な子供、家族、コミュニティ、自然環境など——で適切に評価しており、お金、ファイナンス、企業は手段であつて目的ではないと考えている。社会学者の主張によれば、基本的ニーズを満たすのに必須な最低所得水準を超えると、協調的で思いやりのあるコミュニティのメンバーであることの方が給与や銀行預金残高と比べて、幸福や情緒面での健康を示すのにずっと良い指標になる。われわれ人間は社会的な種なのである。われわれ人間の脳は結びつきを求めるようにできている。われわれ人間の健全な発育と機能は思いやりのあるコミュニティの支援に依存している。他人と結びつきたいというわれわれの衝動は制約を受けたり阻害されたりすると、自分自身や他人にとって破壊的な形で表現される可能性が高くなる。健全なコミュニティというのは、経済生活にかかわる組織への関与を含め積極的な参加というものを通じて、思いやりのあるコミュニティの絆を育てることを後押しする組織になっている。

多種多様な習慣、言語、宗教、政治イデオロギーに反映されたあらゆる文化的な相違にもかかわらず、心理的に健全な人間は重要な価値観や抱負を数多く共有している。アブローチはそれぞれ違ふかもしれないが、われわれはみんな健康で幸せな子供、愛しい家族、生き生きとした自然環境に囲まれた、思いやりのあるコミュニティを望んでいる。われわれは協調、正義、平和のある世界を望んでお

り、われわれは自分の生活に影響する決定について発言権を求めている。それが企業メディア、広告業者、政治的な煽動家によって歪められていない人類の本当の夢である。もし人類に未来があるとするれば、その夢をわれわれは今こそ実現しなければならない。

新しいストーリーの力

本書（原著）が刊行されて以来、われわれが共有した文化的なストーリーの力を私はますます意識するようになった。われわれが望んでいる世界の実現にとって最大の障害になっているのは、帝国以外に選択肢はないとする文化的なストーリーである。それはいろいろな形態をとっており、資本主義の行き過ぎた強欲に唯一代わり得るのは社会主義の衰弱的な抑圧だとするストーリーもそれに含まれる。このストーリーはともに破綻した二つの経済モデルの間で、偽りの選択を迫るものである。ともに一握りの最上層部を除けば、万人にとって自由と創造性を窒息させる容認しがたい権力の集中を招いたがゆえに崩壊した。これに代わり得るのは地元の人々とコミュニティの力に根差し、協調性と創造性に関してわれわれ人間が本来もっている能力を解放する経済システムである。

われわれが夢見ている世界が可能であると認めるべく、一般化している文化的なストーリーを変えることが、その実現に向けた第一段階となる。第二段階は新しいストーリーを生きて、それを現実のものにすることである。第三段階は次のような公的政策に対する政治的支持を動員することによつ

て、民主主義を実践することである。すなわち、生活に奉仕する革新に従事し、協調、コミュニティ、環境責任という地球共同体の価値観に向けてインセンティブを変化させる機会を拡充するような政策でなければならぬ。私が個人的に関係している以下のような三つのイニシアティブが参考になるだろう。

・ **ストーリーを変える**…「ポジティブな未来ネットワーク」(PEN)はコミュニケーション団体で、ウエブと『イエス!』という機関誌を使って、自分自身の生活やコミュニティで、また全国のおよびグローバルなイニシアティブを通じて、地球共同体の可能性を証明している人々のストーリーを普及させている。PENはこのようなストーリーを通して、新しいアメリカの外交政策、新しい経済、新しい全国的な政治コンセンサス、新しい地球温暖化対策、喜びと達成感をもたらす新しい持続可能なライフスタイルなどの可能性に関する意識を高めている。

・ **変化を生きる**…「地方経済活性化のための企業連合」(BALE)は、コミュニティ指向型で地方所有の独立企業が協力して、地球共同体の価値観に基づく新しい経済の相互扶助的な関係を育むための地方ネットワークの連合体である。このようなネットワークはわれわれ一人一人がどこで買い物し、働き、投資するかに行っている選択の含意について、コミュニティの意識を高めている。これは地方の食料システムを再建し、地方におけるエネルギー

自給に向けて努力し、地方の建設を緑化し、地方の投資を円滑化するなどさまざまなことを行っている。

・ **民主主義を實踐する**…新たに設立された「新しい経済イニシアティブ」(NEI)は、地球共同体経済の価値観や制度を生きることによって、ボトムアップで現実のものとしている人々を支援するような新しい経済政策課題に対する支持を結集・動員することをコミットして、進歩的な団体、思想家、活動家の連合体である。

新しい経済の機会

アメリカでは、われわれは一般にウォール・ストリートとメイン・ストリートの経済的利益が好対照であることに注目している。メイン・ストリートとは、真の財やサービスの生産と交換に従事している地方企業や労働者から成り立っている実体経済、すなわち真の富の生産に専心している世界のことをいう。ウォール・ストリートとは、グローバルな金融市場とそれに奉仕している企業のことを指し、お金をもっている人々のためにさらにお金を儲けることに専心している世界のことをいう。金融のメルトダウンはウォール・ストリートが金融投機、侵略的な融資、偽りの行為、強欲、無責任な権力の世界であるという赤裸々な現実を露呈した。このような慣行は富を創造しない。それは富を値する人から値しない人に移転するとともに、その過程で社会・環境的に荒廃をもたらしている。

帝国経済の目的は支配階級の金融的な権力と資産を増やすことにある。その金融機関はお金をもっている人のためにさらにお金を儲ける能力によって主に評価される。その過程で有用な財やサービスが生産されたとしても、それは偶然でしかない。民間投資家に特権を付与している会社という免許は気軽に交付され、その取消はあるとしても稀でしかない。ウォール・ストリート金融機関というのは帝国お気に入りのプレーヤーなのである。

地球共同体経済の目標は人々、コミュニティ、自然のニーズを満たすことにある。その金融機関の唯一の目的はメイン・ストリートの金融ニーズに奉仕することである。投資家グループに特権を付与する会社という免許を政府が交付する唯一の理由は公益に奉仕するためである。地球共同体経済はパフォーマンスを人間および自然の健康と幸福に関する指標を基準にして評価する。そのルールは公平性と所有権や意思決定における広範なコミュニティ参加を優遇する。それはお金を創造する権力を公財にお金を出す政府の手に預ける。侵略的な金融の居場所はなく、したがって現在われわれが知っているようなウォール・ストリートの金融機関の居場所もない。

信用バブルの崩壊がもたらした市場諸力は、ウォール・ストリート金融機関の不可避的な規模縮小を強制している。大局的にみると、帝国が負けて、地球共同体が勝ったということであり、悲嘆したり妨害したりすべきではなく祝賀すべきである。それどころか、投機や侵略的な融資が儲からないようにするルールの実施によって、その動きを加速化すべきである。

真の豊かさとは安全保障

帝国のチャンピオンは経済的優先度の秩序を変えると、経済的な大惨事と耐えがたい困窮が発生すると主張している。われわれのほとんどにとっては、まったく正反対であり、地球共同体への方向転換は長いこと全人類が共有してきた夢である物質的な満足と精神的な豊かさの世界を実現するための鍵となる。その可能性を想像してみよう。われわれは軍事から保健ケアや環境再生に、刑務所から学校に、自動車から公共輸送手段に、郊外で無秩序に拡大した住宅地からコンパクトなコミュニティに、広告から教育に、金融的投機から生産的投資に、富裕層に贅沢な奢侈品を提供することから万人に基本的な必需品を提供することに資源を振り向けることができる。その結果として、安全保障が強化され、われわれの健康と幸福に最も必須な物質的な財の豊かさも高まるだろう。

アメリカが適例である。アメリカの安全保障にとって最大の脅威は、気候の混沌、石油への依存、食料供給の混乱、水不足、国内における銃の暴力、浪費的な借り入れ、ドルの暴落などから生じる。このような脅威は、通常の軍事的な脅威に直面してもいないのに、わが国が強力な軍備の維持に焦点を置いていることによって、著しく大きくなっている。軍事科学の学徒ならずと前から、民間人のなかに紛れ込んでいる通常でない敵（例えばテロリスト）に通常の軍事力に対応するのは愚劣だということを知っている。というのは、それに伴う民間人の生命や財産の損害を受けて、通常でない敵の軍事力は支持を結集できるからだ。この真実はベトナムにおけるアメリカの経験で確認され、イラク

とアフガニスタンにおけるアメリカの経験で再確認されている。

日本は特にアメリカとの関係を中心に軍事的な安全保障の問題に関して、みんなが共有すべき重要な教訓を示している。日本国憲法の第九条は外交手段としての戦争を放棄し、国防衛に必要とされる程度の水準を超えた恒久的な軍事力の維持を禁止している。われわれアメリカ人としてはわが国自身も含め、すべての国の憲法に日本のような原則を挿入すべく他の諸国と協働することによって、われわれ自身の安全保障を最もうまく高めることができる。われわれは次のように行動することによってわが国の安全保障を最適な形で強化することができる。

- ① わが国の財産を枯渇させている陳腐化した戦争機構を解体する
- ② 過去の戦争経済を未来の緑色経済に転換する
- ③ わが国の人的・物質的な資源を動員して、わが国の安全保障と福祉に対する真の脅威に取り組み
- ④ 世界の他の諸国と協働して同じようにする

日本では一九八九―一九九〇年のバブル崩壊以降、多くの人々がアメリカ、ヨーロッパ、中国の経済成長パフォーマンスを賞賛の目で眺め、少なくとも通常のGDP成長率の指標でみる限り日本は後れを取ったようなので欲求不満を感じている。私は日本の方々に対して日本経済の相対的なパフォーマンスを見直して、GDPは真のパフォーマンスを測るのに妥当な尺度ではないということに気づく

べきだと強く主張したい。

一部のアメリカ人が享受している豪華なライスフタイルについて、おそらく新聞を読んだのだろう。しかし、アメリカの中流階級が蝕まれたことや、日本人に取り残されたとの感を抱かせているライフスタイルは、典型からはほど遠いスーパーリッチというごく一部の階級のものにすぎないことはあまり知られていない。典型的なアメリカ人労働者の賃金はインフレを考慮すると目減りが続いている。ほとんどの家計は家賃を払って、食べ物やテーブルの上に並べるのが精一杯で、ますます債務の深みにはまり込みつつある。

アメリカの経済成長として報道されているもののほとんどは、二〇〇八年に崩壊した金融部門の成長による。金融部門の成長は大体が侵略的な融資とマネーゲームの組み合わせによって作り出された幻想である。金融バブルと債務の山を築くことを通じて幻の富を創造したものの、真に価値のあるものは何も生み出していない。幻の金融資産は富裕層の金融資産を水膨れさせることによって、社会のその他の部分で縮小しつつある真の富に対する不労請求権を増加させた。それは生産的であるどころか、一種の合法的な窃盗である。わが国の経済成長に関する統計は著しい過大評価にもなっている。それは経済のパフォーマンスが悪いという現実を隠蔽するために、政治家が意図的な統計操作を行った結果である。

一方、アメリカ経済を牽引している大企業はわが国の製造業や研究開発能力を空洞化させ、金融面では対外債務を天井知らずに増加させている。結局のところ、アメリカ経済は修羅場と化している。

その間、日本経済はエネルギー効率でリーダーになり、燃費の良い小型車市場を支配し、貿易黒字を積み上げ、失業率を維持し、最小限の債務でほとんどの日本人のニーズを満たしている。このような指標をみると、パフォーマンスが良好で、将来の地球共同体経済に向けて世界の手本になり得る経済体質になっているのは日本である。もし日本が過ちを犯しているとすれば、それはアメリカのような対外債務を返済する能力が低下しつつあり、率直に言ってそうする意図がまったくない債務国アメリカに対して、自動車を初めとする製品を輸出することに過度に依存するようになってい

あろう。

日本は平和の分野で世界有数の手本になっているだけでなく、正義にあふれた持続可能な経済モデルの開発でもリーダーとなっている。日本はこのリーダーシップに誇りをもつべきである。それを継続し、他の分野にも拡大するよう強く主張したい。日本は強力で前向きなモデルを提示するのに他、どの国よりもいい立場にあり、世界もそのモデルを必要としている。

われわれ人類は万人のために機能する世界を創造するために、国籍、宗教、人種の違いを超越して協働することで地球共同体を現実のものとするには、ブレイクスルー的な絶好の瞬間を迎えている。コミュニティ・ベースの生活に奉仕する経済を拡大し、戦争を終焉させ、軍事資源を平和利用に再配分することによって、われわれは前進することができる。ここにトレッドオフ（二律背反）はない。社会的・環境的な破綻を回避するのに必要な制度的・文化的な転換は、人類共通の夢である世界を実現するのに必要な転換と同じなのである。

目次

謝辞	
大転換	xi
日本語版への序文	xiii
	iv

プロローグ 可能性を求めて

狭くなりつつあった地球上で成長	4
実現されていない潜在力の悲劇	8
企業主導による経済のグローバル化に抵抗	12
どんなノーマルにも必ずやイエスがある	14
大転換につなげる	19
議論の概要	25
本書の構成	29

パートI われわれの未来を選択する

第1章 選択

サンタ・テレサ農場	36
可能性を証明する	39
決定的に重要な選択	43
最後の自由	52

第2章 可能性

57

35

1

初期の頃	140	137
固く守られている秘密	138	
第5章 神が女性だった頃		137
パートII 帝国の悲哀		
意識から行動へ	124 120 118	
制度的・技術的な手段		
グローバルな現象		
精神的意識	116 112	
文化的な意識		
第4章 機会		109
偉大な仕事	104	
さらに高軌道に上る		96
自滅的な戦争	92	
現実の攻撃	89	
麻痺的ストレス下にある地球		84
第3章 緊急事態		81
文化にかかわる政治	75 74	
地球共同体の心理学	68	
帝国の心理学	58	
意識の覚醒化		

	女神の文明	142
	帝国への転換——性差の視点	
	帝国への転換——規模の視点	
	小さくてもバランスがとれている	154 150 147
	彼のストーリー（歴史）	156
第6章	古代の帝国	
	メソポタミア	163
	エジプト	168
	ローマ	172
	封建的な封土	180
第7章	近代の帝国	
	犯罪貴族と犯罪シンジケート	189
	民主主義の挑戦	198
	帝国の逆襲	
	お金のルール	206 201
第8章	アテネの実験	
	アテネの民主主義	212
	政治哲学	218
	リーダーシップのジレンマを解決する	
	啓蒙	228
		221
		211
		187
		161

パートⅢ アメリカ、未完のプロジェクト

第9章 不吉な始まり

金権政治

神政政治

虐殺

奴隸制

238
239
244
247

第10章 人々が反乱を主導する

多元性の力

反抗的で漂浪的な精神

国王と決別する

エリート層による乗っ取り

253
256
258
265

第11章 帝国の勝利

だれが支配するか？ 有産階級の白人男性の、彼らによる、彼らのための国家？

憲法による金権政治

連邦主義者のプログラム

ジェファソンのプログラム

西方拡張

帝国主義的企業

グローバル化する

帝国主義的覇権の推進

269
272
275
282
283
285
289

第12章 正義を求める戦い

死ぬことを拒否している言葉
中産階級と労働者階級の闘争
ニユー・デール政策 307 300
316

第13章 目覚ましコール

帝国に対する文化的・経済的挑戦
ステルス政治（隠密政治）
超党派の金権主義 335 226
目覚ましコール 342 341
パクス・アメリカーナのビジョン 345

第14章 心の監獄

帝国の繁栄ストーリー 357
帝国の安全保障ストーリー 364
帝国の意味ストーリー 369
議論をしぼる 373

パートIV 大転換

第15章 厳格な父か古時計かを超えて

大対決 382
あなたが抱いている神のイメージを教えてください 388

381

355

325

299

	生きている宇宙の科学	397
	成熟化への歩み	399
	第16章 創造主の叙事詩的な旅路	
	現代の創世ストーリー	404
	生命は選択する力	407
	生活は戦い	409
	生命は互恵的なエンパワメント	414
	森林生態系からの教訓	416
	人間の体からの教訓	420
	第17章 地球共同体の喜び	
	つながるように組み込まれている	427
	目に見えないカリキュラム	436
	教師としての自然	441
	地球共同体	446
	幸福とは思いやりのあるコミュニティ	451
	第18章 新時代のストーリー	
	地球共同体の繁栄ストーリー	459
	地球共同体の安全保障ストーリー	462
	地球共同体の意味ストーリー	466
	可能性のストーリーを発見し共有する	470
		470
		451
		457
		425
		403

パートV 地球共同体を生み出す

第19章 下からリードする

戦略

経済的な転換

政治的な転換

文化的な転換

483 479

487 485

第20章 政治的多数派を形成する

文化政策

政治的コンセンサスの基盤

子供たちのために

保守自由連合

497

501

513 506

第21章 創造的な潜在力を解放する

生きている経済

生きている政治

生きている文化

519

524 519

530

第22章 ストーリーを変えて、未来を変えよう

未来を変えるためには

居場所の発見

呼びかけに応じる

539

540

543 540

545

注 1